
踊り子と刺繍と政治

みか

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

踊り子と刺繍と政治

【Nコード】

N5836R

【作者名】

みか

【あらすじ】

バレエを愛する女の子がコンクールでの演技を終えた後に異世界トリップ。

コンクールでの結果が気になるし、今着てる衣装にもしわが付いちやって、最悪…

そういえば、ここどこ？

踊り子とトウシューズ

日が温かい。

今日もいい天気だな…

こんな風に肌をさらしていたら先生に「日焼けするでしょっ!」って怒られるけど

たまにはこうやって全身で太陽を受けるのも必要だと思う。

光合成よ。光合成。

それにしても

なんで私光合成してるの？

さっきまでコンクール会場にいたはずじゃなかったっけ？

おっかしいなあ…

起き上がって周りを見渡してみる

「…うーん。おっかしいなあ…」

「どうよ、ここは。」

私の眼には狭い控室の壁なんかはなく

広大な緑地が広がっていた。

馬で駆けたら気持ちがよくさそう。

「モンゴルかつちゅーの…。」

とりあえず立ち上がって周りを見渡す

今着ている衣装は中世の村娘の格好だからちょっとこの風景には合っていないかも。

やっぱりこういう風景には民族衣装よね

刺繍びっしり!ってやつが…うん

現実逃避もほどほどにして

私はどつちに歩いていくべきか考えた。

太陽の位置から方角を知ろうと思ったが

今を生きる都会っ子の私には到底無理な話で。

とりあえず地面が緩やかな下りになっているので

下に降りって行ってみよう。

人がいなくても、川があったら何とかできるだろう。

よし！

と意気込んでから私は歩き始めようとして

ふと足元に目を向けた。

トウシューズは脱いでいこう。

草の露とかがついたら痛みそうだ

踊り子と裸足

しかしほんとにいい天気だ
お布団干したら気持ちいいだろうなー

少しずつ平野を下って行った私は遠くに水たまりがあるのを発見した。

湖だろうか？池だろうか？どちらにせよ水気だ！水面が太陽の光を反射している

天気がいいのはうれしいが、実は少し暑くてのどが渴いてきていたのだった。

私は水のあるほうへ走って向かった。

「あー、おいしいー！」

湖だった。飲めるかどうか不安だったけどこの際気にしていられない。

山のほうから流れてきているようで、水は澄んでいて小さい魚がそよそよと泳いでいる

私は一人で（まあ、あたりまえだけど）ヨカッタ、ヨカッタいいながら水をごくごく飲んでいた。

そしてのどの渇きが潤うと、むずむずしてきた。別にトイレなわけでも、泳ぎたいわけではなく

私の場合は踊りたくなってきたのだ

「水を見つけて喜ぶ、夜盗に襲われて命からがら逃げてきた女の子のおどり〜」

何ともな設定だけど、この遊びって結構面白いんだよねー

そのあと道に迷った旅人に水源を教える神の使いの踊りだとか水汲みに来た貧しい女の子の踊りだとかをした。

しばらく踊ると満足して近くの木に寄り掛かった

私はこの湖の向こうを見つめる。

さっきまで見ないふりをしていたが、いつまでもそうしているわけにはいかないだろう。

広い草原の向こうに、ほんっとーに小さいけれど集落が見える。

あそこまで行くのにはどれくらいかかるんだろう

日が暮れてしまうだろうか

それなら、ここで一夜を過ごしたほうがいいのか

なにより、その集落で人に会って

ここが異世界であるということをもっと知ることが

なにより、怖かった。

しばらくぼーっと集落のほうを向いていると何かがこっちに向かってきているのが分かった。

だ、だれ!?

もしかして私を捕まえに!?

パニックになりそうになった私は

とりあえずさつきまで寄りかかっていた木に足をかけた。

山育ちをなめるな!

なかなか立派な木の中に入り、何が向かってきているのかもっとよく見ようと

木の中を移動しようとしたとき先客がいることにかが付いた。

まず目に入ったのは皮で作られたブーツ。

素晴らしい刺しゅう入り。

そのまま視線を上げていつてズボン、ベスト、肩

そして顔…

…を見ようとしたけどいきなり襲いかかられて顔を見ることはできませんでした。

襲いかかられたとき、とつさに私は顔を蹴り上げたからだなんて

とても、言えません…

踊り子と裸足（後書き）

筆者はバレエを少し習っていたことはありますが
知識皆無に等しいです！

どうかご容赦ください・・・orz

踊り子となめし皮

私は判断というよりも感覚で相手の顎を蹴り上げた。

バレエを長くやっていると

海外で行われるコンクールに行くと、時々行方不明になる子が出てくる。

たいてい付き添いの家族とかだけど

みんなさらわれてしまうのだ。

バレエの先生もそれは知ってるからよくストレッチがてらに護身術を教えてくれた。

ああ、私ってばなんで蹴り上げるだけしかしなかったんだらう！

他にもいっぱい教えてもらっていたのに…！

男の人は落下途中にあった枝を何本か折りながら

受け身を取らずに地面と仲良くなった。

か、肩からいったよ…

うめいているけど、大丈夫だろうか？

「アズナブル様！

やはりこちらでしたか！」

探したんですよ！

馬に乗って現れたのは一人の青年
颯爽と馬に乗って現れ、颯爽と馬から降りた。
よく見えないが、颯爽とした動きはするが…

「ごついな…」

殴られたらひとたまりもなさそうである。

「手を貸してくれ。

木から落とされた。」

「落とされた？なぜ」

アズブナール様とやはらはこちらを見上げ、青年もそれに続きこちら
を向く。

目があった。

「あの少女にけり落とされてね」

かくんかくんと揺れる顎を何とか抑えたいが
いかせん乗馬経験がなさすぎる。

これなら歩かされたほうがましかもしれない。

私は今アズブナール様とやらの腕の中にいる。

けれど優しく抱擁とかのうれしい展開ではなく

彼の持つ綱と電車ごっこのように前に出された両手にぶさがられてい

るだけだ

この状況ならさっさと馬から降りて逃げることもできるんじゃない？

「今逃げたところで、すぐに首を掻ききられて終わりでしょうね。」

デスヨネー

きよろきよろしていると青年（話の内容からブライム君と推定）がそんな私を目ざとく見つけて声をかけてきた。

確かに回り何にもないところで逃げたってすぐつかまるでしょうね
私はおとなしく馬の首に抱きついた。

アズブナール様とやら一行はやっぱりというか
視界の先のほうにある町へ向かっている。

太陽が真っ赤な光で私たちを照らしながら
私がりりてきた山の向こうに消えていこうとしていた。

踊り子と懐疑

さすがに神経の太い私でも、
常時隣から警戒してますオーラが出されているのは神経をつかう。
つまり疲れる。

アズブナール様とやらは馬のくつわをひくブライム青年よりも
この状況に楽観的らしく、鼻歌を歌ったりしている。

様付で呼ばれるくらいだからそれなりの位の人なんだろうけど…
てかブライム！（最早呼び捨て）

そんなに警戒するならいつそ私の手を縛って馬に引きずらせる！

…引きずられるのは嫌だな。

「そういえば、君の名前は？」

いきなりの言葉に私は一瞬誰がしゃべったのかわからなかった。

「アズナブール様…！お控えください！」

ブライムがあわてたようにアズブナール様とやらに声をかける。

ん？アズブナール？アズナブール？

「いいじゃないか。ここからだとはまだ数刻かかる。

それまでずっと無言というのが私にとってどれだけ苦痛であるか、
君にはわかっているだろ？」

つまりゴリ押しですね。アズ、なぶーるさま？

「で？名前は？」

「…角梨枝子です」

「…ごめん、もういちど」

「すみ、りえこです。」

りえこが名前で、すみが姓です。」

「りえこ、か。」

変わった名前だね…どこかの民族の名前だったかな？」

アズナブル様！とブライム君が焦ったように声をかける。
そんなに主人と不審者の接触がいやか？
まあ嫌だろうけど。

「民族はよくわかりませんが私の住んでいた国では
一般的な名前です。」

…失礼ですが、あなたは？」

「こちらの方はアズナブル・レスリ・アルフレッド・ペラダン様
である。」

…別にお前に聞いたわけじゃないんだけど？ブライムよ

「私はアズナブル・ペラダンという。
気軽にナバーとかアズと呼んでくれ。」

君のことはリエコ…と呼んでも？」

「では、アズ。私のことは呼びにくかったらリエでもかまいません。あなたの呼びやすいように呼んでください」

ブライムは無視の方向ですね。わかりました
にここにことたがいに笑い合っていたら前方でぽつと明かりがともった。

見るとブライムがどこから取り出したのかランプに火をつけたものを握りなおしているところだった。

もう日は山に隠れてしまっていて、電柱などの障害物のない空は青と赤のグラデーションが素晴らしかった。

「伝達です。」

ブライムはランプを私に押し付けると前へ走って行った。

確かに何か飛んできている。

鳥…かと思ったが、その影はどんどん大きくなって

最終的には恐竜というか竜というか

ドラゴンの姿で私たちの前に降り立った。

踊り子と空

むせた。

なに、あれ。

超風が来るんですけど。ここは竜巻の中かと思うくらいなんですけど。

まっじつで。なに、あれ。

大きさは馬二頭分くらい。結構大きい。

大きな体だがそれでいてスマートだ。

絵本の中のようなドラゴンで、長い首にしまった胴体をもっていた。体全体はイモリのような皮でおおわれているようで鈍い色をしている。

羽の生えている背中にはひもで籠が取り付けられていて、

しかもその籠の中には人が乗っていたらしく、籠から出るとブライムと会話を始めた。

「ドラゴンが珍しいか？」

アズが声をかけてきた。私は夢見心地で正直に答えた。

「珍しいというより、始めてみました。

私の国…というか世界にはドラゴンなんて空想上の生き物でしたから。」

「へえ…ドラゴンがいなくなると…空の移動なんかはできなかつ

たのか？」

そこで初めて私はアズのほうへ顔を向けた。
そして向けた直後に後悔した。

首が痛いし、

そしてなによりなかなか好青年なアズの顔には真っ赤を通り越して真っ青になってしまっている私のつけた跡がくっきりと浮き出ているからだ。

やりすぎちゃったか……てへ

「私のいた世界では科学が進歩していて

電気を使ったり燃料を使ったりして移動していました。

中にはこの空のもっと上の空間まで行ったものもあるんですよ」

私が誇らしげに言うと、さすがのアズも驚いたらしく

「この空の上へ？そんなことがどうやってできるんだい!？」

アズは俄然元気になったが、私は別に宇宙に強い関心を持っていたわけでも

理系でもないので満足に答えることはできなかった。

とりあえず、鉄の船で……と適当なことを言っているとブライムがこちらに向かって走ってきた。

「アズナブル様。王宮から至急戻るようにとの連絡です。

この者はわたくしが責任を持ってあるべきところへ……」

「ああ。私の屋敷に連れて行ってやってくれ。

手荒な真似はするなよ。」

「…かしこまりました。」

ブライム不満そうだなー。

てか私を保護してくれるのか。ありがとうアズ！

でも、なんで私みたいな正体のわからないものを保護したりするんだろう？

もし私が逆の立場だったら警察とかに引き渡すけどね。

ああ、懐疑の念が…

ここまで来たら、もうなんだっていいって思っていたはずなのに。

竜の籠の中にアズと伝達に来た人が乗り込み

私とブライムは馬に乗り、町のほうへ歩き始めた。

踊り子と町の喧騒

町についたのはもう夜になってからだった。

ブライムはさつきアズがしていたようにうまの手綱を引きながら上手に人の間を縫って馬を進める。

村に入っただけは人の多い通りを歩いたけれど、すぐに裏道に入った。

町に入って気が付いたことが、ここは西洋的な生活をしているということだ。

服装とか、生活用品とか。

裏道は民家の裏手に面していて、洗濯物が干してあったり子供が遊んだりしている。

農業はこの町ではあまり盛んではないようだ。

その分商業が発達しているのか、町は家や商店らしきものでぎゅうぎゅうだった。

暗くなった空の向こうに、光が見える。

小さな光だが数が多いためとてもきれいだ。

「あれは王宮だ。王侯貴族とそれに仕えるものの住まいと、各政務所がある。」

私の視線に気が付いたのか、ブライムが教えてくれた。

「この国は王政なの？」

昔なら、王政であることは不思議ではない。

私の質問に少しブライムは驚いたようだが、教えてくれた。

「私たちがいるこの国は基は遊牧民だったが、安定した生活を求め

たものがその土地にとどまり生活を始めたのがこの国の始めだ。

今この国はトレルイエ王国と呼ばれている。

現王は若くして即位したがその手腕は認められていて、即位してから一度も侵略を受けたことはない。

人望も厚く、民からの信頼もある。

しかし問題なのは皇妃であるヴァネッサ様との間に皇子を授からなかったことだ。

側室との間には三人の子をもつけられた。

一時はヴァネッサ様を離縁する話も出たが陛下の強い要望でそれは避けられた。

陛下はもはやご老体。

陛下の跡を継ぐ者がだれになるかが注目されている。

候補は三人いるが、一人は田舎へ

もう一人は外交で飛び回っていらっしやる。

王になるための教育を受けたのはただ一人。」

最早誰も、次期王について口出しはできん。

…ブライムがいきなり饒舌になった。

なんでだ。

私はへえ…ぐらいいしか言えない。

その次期王っていうのがアズなんだろうか？

聞いてみると鼻で笑われた。むか。

「アズナブル様は確かに優秀だ。

しかし陛下になれるかとなるとまた違う。

お前は…本当に何も知らないのだな。」

「だって、来たばつかだし。いろいろ知ってるほうが変でしょ。」

それにアズはあなたの主じゃないの？

そんな…陛下の器じゃないみたいなこと言っているの？」「

私が少しからかくくらいの軽い気持ちで言っと、ブライムは黙り込んでしまった。

「え…つとお、わああれすごいかわいいー」

気まずい。沈黙は気まずい。

何か踏んではいけないところを踏んでしまったようだ。

「主だ。しかし、器じゃない。」

王座を求めてしまうことが、何よりのその証拠だ。

私はアズナブルー様に仕える身分だ。

だが…」

あまりアズナブルー様を信用しないほうが身のためだ。

踊り子と刺繍

町の喧騒が遠い。

私はいま、ブライムに何を言われたのかをゆっくりと理解し彼のほうへ向けていた顔を前へ戻した。

いま、ブライムは私に

「アズナブル様を信用しちゃだめよ ミ」
的なことを言った。よね…？
聞き間違いじゃないよね？

それは

「アズは私を利用でもしようとしているの？
それとも彼は奴隷商人とか人身売買にかかわっている人で
私は売られる運命。とか？」

ブライムは一瞬動揺したようだが、気を取り直して話した。

「べつにアズナブル様はそんな非人道的なことはなさない。
むしろ、アズナブル様は…。ブライム兄ちゃんじゃん！
何してんの…ってデートか。」

ブライムより少し若い、というか幼い少年が声をかけてきた。
髪を短く整えているさわやか少年である。

「ちがう…」

ブライムは否定するが、じゃあどんな関係か聞かれるのを恐れてかあまり強くは言わない。

ふと見れば、町の多くの人が道を上って皆同じ方向へ向かっている。ブライムに声をかけた少年もまた、この先に行くようだ。

「まあ何でもいいけど。

じゃあ俺は教会行ってくるから。

兄ちゃんも、また暇ができたからおれん店よってくれよ！」
そこの彼女もね！

少年は走って去ってしまった。

その時、彼の着ていたベストが目に入った。

正確には、そのベストに施されていた刺繍だ。

星のようなとげとげした模様と、花の模様の対。

あの刺繍はアズのベストにも施されていたしブライムのベストにもまた、施されていた。

少年のはしって行った方向、教会があるであろう方向に歩く人を見
てみると

皆がベストやスカーフ、服の裾などに同じような刺繍が施されていた。

「ブライム、さん。」

「なんだ。」

「あなたの着ているベストの刺繍の意味は何ですか。」

「これか？これはトレルイエ王国が信仰しているオートウイエ教のシンボルだ。

信仰をもつものはこの刺しゅうを施したものを着ることが奨められている。

まあ、刺繍の施されている服が国の援助で安くなるため、ここに

る平民の多くが着ていることは特に珍しいことではない。
…なぜだ。」

「ブライム。私がアズに保護されたのはその、オートマ教が大きく
かかわっている?」

「…オートウイエ教だ。」

確かにアズナブル様はオートウイエ教の熱心な信者といわれている。
る。

さらに妹君はオートウイエ教の巫女に自ら立候補したいと
先日アズナブル様に申し出るほど熱心だ。」

「巫女?それは

何かアズの妹がなりたいというにはおかしい役職なの?」

「おかしいことではない。」

ただ巫女になると一生を神殿奥深くで過ごすことになる。

それ故、政治的利用ができる上流階級の子女より、平民が選ばれる
ほうが一般的だ。」

そこをアズの妹は他薦でなく自薦で、しかも平民でないのに巫女に
なるうとしている。

「アズはそれを止めたいの?」

ブライムはくしゃりと苦い顔をした。

「そうだろうな。」

「アズナブル様の妹君はすでに婚約者がいらした。」

ブライムの吐き捨てるような言い方に

私はこの先の話の展開が手に取るようにわかってしまった。
そして私のこの先も。

「妹さんは結婚したくなくて、巫女になろうとした。

しかし妹の結婚がぼしゃになったらアズが困ることが起こる。

何としてでも結婚させたいが

もともと不人気の巫女には誰も立候補するものがない。

そんな時目の前に落っこちてきた少女。

これは天の思し召し。

こいつを巫女に仕立て上げてやろう！

ちようどいいことに身寄りはないさそうだ

…っつとこっ？」

踊り子と大理石

かかとと床がぶつかり合って、鋭い音を立てる。

この音は好きだ。

まるで私の後ろから、勝者のファンファーレが鳴っているようじゃないか？

わたしはひときわ大きい黒い扉の前に行きついた。

扉の前の従者が私のブローチを確認して扉を開ける。

しかしそこには私の会いたい人はいない。

この部屋は所詮前室というやつだ。私が会いたい人はこの先にいる。

「失礼します。」

部屋にはほのかな明かりがともっていた。

この方は城下ではどれだけ明かりが足りなくなっているかをご存じないようだ。

「ああ、アズナブル。遅くまでご苦労。」

「ありがたいお言葉。ありがとうございます。シャルル様。」

「うん。で、お前も聞いたかと思うが

父上が再び危篤に陥られた。」

部屋に不思議な空気が満ちる。

緊張するような、それでいてひどく興奮するような。

「お見舞い申し上げます。」

「ふ…受け取っておこう。」

シャルル様は席をお立ちになられ、窓際へ歩み寄られた。町は夜の闇に包まれていてこの城に続く道と、連絡塔だけが明かりを灯していた。

「それで？朗報とは？」

しびれを切らしたようにシャルル様が問いかけてきた。

まだまだ忍耐強くはないらしい。

「フラーの代わりが見つかりました。

私の前にまるで聖典のように現れてきて…

黒い髪、黒い瞳、きしゃな肢体。初め見たとき、目を疑いましたよ。それに身寄りもないようです。」

シャルル様は窓から身を離し私のほうへ歩み寄った。

「本当か、アズナブル。」

「もちろんでございます。あの者ほど、フラーにふさわしい者はおりません。」

「では、お前の妹にも連絡を。逃げ道はなくなった、と…」

「かしこまりました。」

ふふ…とシャルル様は笑った。

心底面白い、とでもいうように。

「…いかながなされましたか。」

「いや、お前の覚悟を実感していた。それだけだ。

このたびはご苦労だった。

今日は帰って身を休めるといい。追って沙汰を出す。」

「はっ。では、これにて失礼いたします。お休みなさいませ。」

おやすみ、とシャルル様は笑い、私は部屋を後にした。

これでいい。何もかも、計画通りだ。

カミーユはフラァーにならずにシャルル様のもとへ嫁ぎ、

私は外戚の兄の座を得る。

シャルル様が王位を継がれるのも時間の問題であることはだれの目にも明白。

これでいい。

自分の力を過信してしまうくらい、計画通りだ。

踊り子と宮殿

「前を向いている」

ブライムはそういつて馬を駆け出さした。

私は言われたとおり前を向き、馬のたてがみにしがみついた。

たどり着いたのは大きな門を持つお屋敷。

月の光を受けて、白い壁が浮かび上がっていた。まるでシンデレラ城。

門前の守衛にブライブが会釈すると守衛は門を開け、かがり火を持って先導した。

しばらく歩いたのちたどり着いたのは大きな扉で

ブライムが下りるのに手を貸してくれた。

長時間馬にまたがっていたおかげで、足の間が痛い…

よろつきながらブライムについていくと玄関の椅子に座らされた。

暖炉の火が温かい。

「こいつが休める部屋を用意してほしい。」

「かしこまりました。」

ブライムが給仕に声をかけ、自分も椅子に座る。

たがいに目を合わせなかった。

「お兄様？お帰りになられたの？」

その時、中央の階段から白いものが下りてきた。

いや、正確には白い服を着た女の子。

「ブライムです。カミーユ様。

夜分遅くに申し訳ありません。」

「あら、ブライム。あなただったの。
お兄様は？まだお帰りになられていないの？
それに…そのお方は？」

ブライムが椅子から降りようとしたのをその人、カミーユ様はとどめ、
自身も椅子に座った。

「あなたのかわりに用意された、フラーです。カミーユ様。」

フラー。巫女のことだろう。

私はけだるげに顔を上げ、カミーユ様の顔を見た。
カミーユ様はじつとブライムを見つめ、
次いで私の顔を見た。

その瞳は暖炉の火を吸収して燃えていた。

「リエコ、昨日はよく眠れた？」

「はい、アズ。とつてもふわふわのお布団でしたね。」

私、あんなにやわらかいお布団に今まで寝たことありません。」

私が害のない笑みを浮かべると、アズは心底喜んだ。

彼は私に服や装飾品などを与え、私はそれにこたえるように無邪気に笑った。

ああ、私はなんていい人に拾ってもらえたんだろう！
とでもいうように。

実際は私はベットに入っていないし、ましてや一睡もしていない。
それはカミーユ様やブライムも知っているが、二人は何も言わない。

私とアズから少し離れたところで本を読んだり刺繍をしたりしている。

私はアズが次々と出してくる贈り物に喜びながら
昨夜カミーユ様と話したことについて考えていた。

踊り子とレース

春。庭の花が美しく咲き誇るころ、静かに計画は動き出した。いや、本当はもつとずつと前から始まっていたのかもしてない。

「アズ？そこにいるの？」

シヤクナゲの周りから出てきたのはお母様だ。

「お母様。カミーユの様子は？」

「まだ拗ねてるわ。でもあなたのおかげで少し機嫌がよくなったみたい。それにしてもきれいなバラだったわね…庭から摘んでいったの？」

「はい。庭師のロンドにたのんで。」

きれいに整えたお母様の顔がつぶれた。まあ、分かって言ったのだけど。

「庭師？まったく、アズったら。あのようなものに声をかけるなんて…」

わたくし達、ペラダン家の格を下げることにつながってしまつてしまうでしょう？分かつているでしょうに。」

「すみません、お母様。」

ああ、いったいいつから

「綺麗な花をカミーユにあげたかったので。」

綺麗なものを素直に綺麗と思えなくなつてしまつたのだろう。

お母様が「それなら仕方ないわね。」と言って笑った。

何重にも掛けられたレース。

まるで彼女の心のようだ、と思ったのはいつだったか。

このレースはいつの間にか何枚も増えていて、気づいた時にはもう自然なものとなっていた。

「カミーユ。」

「なに？」

燃える瞳を持つ妹よ。

「すまない、ね……。」

「お兄様……？」

窓から入る光が彼女の髪を輝かせる。なんて眩しいのだろう。

私はなんとなく目をそらした。

そばの机に新たに摘んできたバラをそつと置く。

「……。バラ、ありがとうございます。お兄様。」

見るとバラが彼女の髪に編みこまれていた。何物にも染まらない、

白い、純白のバラ。

「ロンドにお礼を言うといい。彼が探すのを手伝ってくれたんだ。」

「ロンドに？珍しいわね、お兄様が庭師とお話するなんて。」

そうだね。と、ちゃんと私は答えられたらどうか。

まるで、内面の自分が非難し、また励ましているようだ。

「カミーユ。」

「なあに？お兄様。」

今日も綺麗だね。

言葉はのどの下で押しつぶされた。

ずっと前から私の中に二人の人格がいるように感じる。

この考えに賛同する私。

間違っているという私。

どちらも私でどちらも私ではない。

それでももう、計画は始まってしまっていて

私は止め方が分からなくて

ただ駒のように進ませられるだけ。

いつから綺麗なものを綺麗と感じられなくなってしまったんだろう。
ちゃんと分かっていたはずなのに、計画と同じくらいずっと前から
私の前にあのカーテンのようなレースが多い被さりいつか何も見え
なくなってしまうた。

カミィユ、今日も

踊り子とすれ違い

「お兄様は私を駒同然ぐらいにしか思っていていらっしやらないの。」
昨日の夜、私をお風呂に入れ服を整えさせた後、カミューが言った。
屋敷の端のほうにあるのだろう、風の音が大きい。ブライムは暖炉
のそばで壁にもたれながら立っている。

「お兄様はお母様の考えをそのまま聞いて育ったような方で、
女性は皆無力で、無知で、愚かだという考え方を持たれているので
す。」

私が初めて自らの意思を持ってフラーの役に志願したとき、お兄様
はそんなものになるより皇太子のシャルル様の妃になるべきだと私
に向かつて言ったのです。」

彼女の瞳は暖炉の光で揺れていた。まっすぐに私を見つめ話を続け
る。

「小さいころからシャルルと私が結婚することになることは分かっ
ていました。」

シャルルとの仲も悪くありません。ですが私はシャルルと結婚はし
ないことにしました。別に独断で決めただけではなくシャルルと決
めたことなのです。」

「…というと？」
「話すと長くなるのですが…この国には長い間女性の参政権はあり
ません。市民もです。」

私とシャルルはこの状況に疑問を持つようになってきました。能力
ある女性が男性の支えるしかできないこの国の現状に。

目の前で能力が握りつぶされることほどつらいものはあ
りませんでした。」

「ですから、私とシャルルは約束したのです。
この国に女性の参政を認めさせようと。」

シャルルは王になって直接改革を。私はこの国の芯となっているオートウイエ教のトップであるフラーになって貴族、市民の精神的な支持を得ようと約束していました。」

「でもアズは自分の地位向上のためにもあなたにシャルルのところへ嫁いでほしくて

どうやってフラーになることを止めようと考えていたら私が現れた……」

カミーユは静かにうなずいた。

「そのように簡単な話であってほしいのですが……」

「いつそ、そのシャルルさんのところに嫁いで二人で改革していったらいいんじゃないの？」

かぶりを振られてしまった。

「複雑な問題なので……一つの視点だけでなく二点、三点から見つめていきたいのです。」

上からの改革だと、どうしても空回りしてしまいます。

昨今の竜騎士の女性率の上昇や様々な女性の台頭により女性の受け入れは市民から始まっているのです。

上からの改革だけではだめなのです……」

うーん。

すごいな……権力があるとこんな悩みというか問題があるのか。
で、私はどうしたらいいんだ？

「えーっと……じゃあ私はその、オートウイエ教？にフラーとして入って女性の地位向上に貢献したらいいんじゃないですか？」

いつ国に帰れるかもわかりませんし。」

なぜ命令しないのだろう？と思って質問したら、カミーユが固まった。ブライムもは？という顔をしている。あれ、そういうことではないの？

「あの…あなた、私の言いたいことがわかるの？」

「え、皇太子と二人で女性の地位向上に励もうとしたけど空気の読めない兄がそれを邪魔する…ってことじゃないの？ですか？」

いきなりがつ！と手をつかまれた。

「ひえっ！？」

「あなた！

教養があるの！？？こんな…すぐに話が分かるなんて…まあ…なんてこと…」

「いや、私の国でも注目されている問題ですから…。」

「あなたの国でもすでに？やはりこの国ももつと急がなくてはね。ほかの国に後れを取っているようではだめだわ！ブライム、紙を！

あなた、お名前は？」

「り、リエコです。」

「リエコ？変わったお名前ね。ねえリエコ？あなたの国の話を詳しく聞かせてほしいのだけれど…」

あなた、こことは違う世界から来たのでしょうか？」

私は息をのんだ。なんでわかったんだらう。

ブライムが文房具や紙を持ってくる。

「なぜ…」

「なぜわかったって？

あなたの着ていた服を見たらすぐにわかるわ。

糸から織り方まで全然違うんですもの。この国ではたまにあることなのよ。違う世界から人が来ることは。

それで？あなたの教えられる範囲でいいわ。あなたの国のことを聞かせてくれる？」

カミィユ自身はペンを持たず、ブライムが準備満タンで待っている。話せれる…というか知っていることは少ないのだけれど…と私はぽつぽつと話し始めた。

私の話を聞きながら、カミィユの瞳は赤く燃えていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5836r/>

踊り子と刺繍と政治

2011年10月8日20時54分発行